

く、ネットワークを構築して、ヴァーチャルな委員会を構成して運営しているようであった。広いアメリカで多忙な人々を集めるのは至難の業であろうから、当然といえば当然な仕組みであろう。

### ③ 化学研究会議 (CCR)

会員は、大学、国立研究所、化学会社の研究トップなどで、化学の研究に関する共通問題を議論する場であり、②で紹介した IRI の化学産業版であると考えて良いようである。96 年末に ACS 等が作成発行した「アメリカ化学産業テクノロジービジョン 2020」の具体的研究開発ロードマップの内 6 分野 (合成化学、計算化学、化学計測、バイオプロセス、材料技術、プロセス科学/エンジニアリング技術) の作成を担当しているとのことであった。

## 5. まとめと感想

今回は一週間の滞在であったが、ちょうど独立記念日の前で、学校も夏休みに入ったところでもあり、お上りさんらしき人達でワシントンは賑わって

いた。EPA、ACSなどを訪れて感じたのは、アメリカは元気にあふれ、アメリカはプロフェッショナルの世界であるということであった。連邦の役人も、学会の職員もそれぞれの分野でプロであり、その分野ではどこへ出ても通用するものを持っていることを感じた。EPAには学会で発表し、座長を務めるドクター保持者がかなりの数存在しているようであり、しかもその人たちが自分で仕事をしているようであった。ACSにも多数のドクターがいて、世界を飛び回って仕事をしている。

振り返って我々の周囲はどうであろうか。自立して自分で仕事をしているであろうか。プロになっているだろうか。いつの間にか日本人の仕事の仕方はきれいごと傾いてしまっていないだろうか。高度成長に浮かれていた間に、我々の仕事への取り組み方もバブルになっていたような感じを受けたのであった。グリーンケミストリーは、化学のパラダイムシフトである。アメリカの化学界はやる気十分であった。

(事務局長 戸村健司)

# 1998 年ナカニシプライズ受賞者に Albert Eschenmoser 教授を選定

1998 年ナカニシプライズ選考委員長  
山村 庄亮

日米両化学会において、「中西シンポジウム」の共催と「ナカニシプライズ」の設置が決定され、その協定書に基づき、中西シンポジウムは日米両国において交互に毎年開催され、その際ナカニシプライズの授与が行われてきている (経緯については、本誌 (49 巻, 第 10 号) に詳しく記載されている)。ナカニシプライズは、生物現象の解明に有機化学、天然物化学及び生物有機化学の分野で顕著な業績を挙げ、国際貢献に寄与した研究者に与えられるものとし、年齢、国籍を問わないものとしており、開催国

で毎年選考委員会を設け決定することになっている。因に最初の中西シンポジウムは 1996 年 12 月 7 日東京で開催され、ナカニシプライズは名古屋大学名誉教授平田義正氏に授与されている。次いで 1997 年の中西シンポジウムは米国で開催され、ハーバード大学名誉教授 Frank H. Westheimer 氏に授与されている。

本年の中西シンポジウムは、12 月 5 日東京において開催されるが、1998 年ナカニシプライズ受賞者としてスイス連邦工科大学 (ETH) の Albert

Eschenmoser 教授が、同選考委員会において選定された。Eschenmoser 教授に心からの祝意を表すとともに、同教授の業績について紹介する。

Eschenmoser 教授は 1925 年スイスに生まれ、1945 年スイス連邦工科大学 (ETH) を卒業し、1951 年 L. Ruzicka 教授のもとで Ph. D. を取得した。同大助手、助教授を経て 1965 年教授となった。1992 年から同大名誉教授になったが ETH に研究室を持ちいまだ活動を続けている。1996 年には Skaggs Institute for Chemical Biology にも研究室を持ち、チューリッヒとカリフォルニアを往来し活発に研究活動を行っている。Ruzicka, Prelog を中心とするチューリッヒ学派の中で頭角を現したヨーロッパを代表する有機化学者である。この間の卓越した業績に対して数多くの賞を受賞しているとともに、数多くの国の学会の名誉会員となっている。主な賞は下記の通りである。Kern Prize (1949), Werner Prize (1956), Ruzicka Prize (1958), Fritzsche Award (1966), Robert A. Welch Award (1974), Davy Medal (1975), Tetrahedron Prize (1981), A. C. Cope Award (1984), Wolf Prize (1986), M.-M. Janot Medal (1988), Cothenius Medal (1991), H. H. Inhoffen Medal (1995)。

Eschenmoser 教授の業績は、天然物合成、新たな合成法の開発、分子構造と反応性に関する研究で顕著である。とりわけコルヒチンの全合成の後取組んだビタミン B 12 の合成研究は有機化学界の話題

をさらったものである。ビタミン B 12 の骨格を corrin 骨格をイミノエステル縮合法を開発することにより左右二つのセグメントから容易に合成できることを示したことから、ビタミン B 12 合成に於いて、米国ハーバード大学 Woodward 教授はビタミン B 12 の左セグメントを、ETH グループは右セグメントをそれぞれ合成し、両者を結合することにより共同でその全合成を完成させている。両グループ 100 名近くの研究者が参加したことで話題となったが、この研究に Woodward-Hoffmann 則が生まれたことも忘れてはならない。Eschenmoser 教授は、この共同によるビタミン B 12 全合成とともに、さらに Woodward-Hoffmann 則をフィードバックした新たな corrin 骨格合成を骨子とした独自のビタミン B 12 の全合成を完成させている。全合成として収斂性の高いものである。この他多くの天然物合成があるが、天然物合成には新たな合成法の開発が伴っているのが特徴である。

ビタミン B 12 合成の後、この研究の成果を corrin 骨格の研究に発展させている。最近では、天然物の合成に関心をもち、生命の根元に有機化学を武器として迫っている。何故、自然が生命を維持するために、核酸、タンパク質のような構造をつくり出したかという疑問を有機合成の立場から解明することを目的に、現在 pyranosyl-RNA を通してこの疑問を探っている。

会  
平成10年  
6-12月  
6月-  
7月-  
29-10  
9月